

Hobomok から *The First Settlers of New-England* へ

—チャイルドと十九世紀初頭の修正主義的歴史観—

中村 正廣

Hobomok (1824) において先住民男性と白人女性の異人種間結婚を取り扱ったチャイルド (Lydia Maria Child) は、その後も短編小説という形でアメリカ先住民物語を世に問い続け、1829 年には当時の修正主義的歴史観に影響された *The First Settlers of New-England* を発表する。1820 年代に隆盛を極めた子供文学やアドヴァイス・ブックの執筆・編集にも携わったチャイルドが、女性教育や家庭教育について幅広く論じる中で書き記したこの歴史書は、アーヴィング (Washington Irving) の “Philip of Pokanoket” (1814) に大きな影響を受けた *Yamoyden* のニューイングランド版とも呼ぶべき *Hobomok* とは全く異なる自虐的で過激な史観を提示している。1820 年代に出版されたニューイングランド先住民の物語は、*Hobomok* も含めその多くが先住民強制移住法案 (1830) 前夜の保守的歴史修正論に与する形のストーリーを展開させるが、チャイルドは *The First Settlers of New-England* において白人入植者たちの暴力と欺瞞に満ちた行動を仮借なく批判し、その行動を正当化したピューリタニズムと William Hubbard からニューイングランド関係者の歴史書を糾弾し、他方において先住民の白人との諸々の戦いを母国を守るための闘争として賞賛に値する行為と捉えている。その際チャイルドが彼女の主張を支える権

威のひとりとして挙げるのがアーヴィングのエッセイである。本稿では、John Gorham Palfrey の *Yamoyden* 批評から生まれたとされる *Hobomok* において白人植民地の先住民との武力衝突の描写を意図的に避けた¹チャイルドが、ニューイングランド植民地と先住民の衝突を扱った物語が矢継ぎ早に発表された 1820 年代の終わりに発表した *The First Settlers of New-England* において、アーヴィングのフィリップ論をどのように解釈し、そこに窺える彼女の史観と当時の先住民強制移住問題に対する彼女の姿勢がどのような関係にあるのかを考察する。

十九世紀初頭の米国ではワンパノアグ族のメタコム（フィリップ）に関する再評価が行われた。² 代表的なものとして、1804 年の Jedidiah Morse と Elijah Parish の *A Compendious History of New England Designed for Schools and Private Families*、1805 年の Abiel Holmes の *American Annals* の二つが挙げられるが、いずれもフィリップ王戦争におけるメタコムの政治的目的とその行動を正当と認めつつも、先住民に対して英国植民地が行った諸々の暴力と残虐な行動は歴史の潮流において不可避的事象とされており、批判の対象として提示されることはない。1820 年 12 月の Daniel Webster のプリマス上陸記念講演に代表されるように、「アメリカの象徴」「萌芽期の共和政体」(Konkle135) としてのニューイングランド植民地という位置づけはこれらの保守的な修正論において揺らぐことはなかった。1814 年に発表されたアーヴィングのフィリップ論は米国の共和政体の揺籃期としてのニューイングランドの位置づけに疑問を呈するという意味においてその歴史を新たな見地から捉え直す試みであった。

「ポカノケットのフィリップ」は、メタコムとワンパノアグ族のみならずアメリカ先住民の習俗と文化への賛美という点で、フィリップ王戦争に対する上記のような保守的修正論とは大きく異なる。Jean Jacques

Rousseau の唱えた「自然状態」を先住民に見たアーヴィングは、彼らこそ「人間性により近い状態」、即ち、「道徳心の生まれながらの成長」であって、文明社会は「この生得の特性の独特で際立った特徴」を「育ちのよさと名付けられたものの水平化する力によって除去」し、「柔弱化」し、その結果「取るに足らぬ偽り」を生じさせるとした (1013)。フィリップ王戦争は「多くの知的人物たち」「自然の真正の創造物である多くの勇敢で気高い心の持ち主」が戦った「人間性になしうる最も気高い闘争」であり、彼らは「勝利の希望も名声を求める気持ちもなく国を守るために最後まで戦った」 (1014) のであり、白人植民者の「宗教的抽象観念の闇」と「迷信的空想」 (1019) に加えてメタコムの「高貴な精神と野心的気質」のために彼は彼らにとって「大きな嫉妬の対象と不安の種」 (1016) となったのであって、メタコムは「生まれ育った土地に愛着を持った愛国者であり、臣民に忠実で、彼らの悪事に怒った君子であり、戦において大胆で、逆境において決然とし、疲労と飢えとあらゆる肉体的苦痛に耐え、自らが信奉した大義のためにいつでも命を捧げることのできる兵士」 (1028) であったとアーヴィングは言う。このアーヴィングの「興味深い伝記」を「最近感謝の気持ちで読んだ」(*First Settlers* 170) ことを明言するチャイルドは、ニューイングランド先住民の苦渋に満ちた歴史を語り終えた後に、ここに挙げた一節を含むアーヴィングの文章を数頁にわたって引用している。

アーヴィングの修正主義的歴史観に基づくチャイルドの歴史論は、*Hobomok* がその視野の外に位置づけたアメリカ先住民と白人植民地の衝突の歴史に真正面から取り組むことになる。「最初のニューイングランド植民の簡潔な物語」の目的は、「我々の巡礼始祖たちが丁重な歓迎と待遇を受けた先住民たちの性格」(*First Settlers* iii) を明らかにし、「最も確かな記録」に基づいて「彼らの土地の強奪者から彼らが受けた扱いが、我々

がこれまで立派に守ってきた、そして今でもそれによって動いていると断言している宗教的法令的制度に正しく違反するものであったこと、そして今もその状態にあることを証明」(iii-iv) することである。「我々の政府の根幹をなす原則を甚だしく破ったという蔑み」(iv) に自分自身を晒すとす
るチャイルドは、しかしながら、透かさずもうひとつの目的、即ち、弱者に対する庇護と慈悲の心の啓発を提示する。「弱者を虐げたいという傾向に耽ることで、あらゆる善の慈悲深い泉がその被創造物の現在と永遠の幸福を増進させるために我々に与えた社会的、そして最善の愛情を我々は自ら奪っている」ことを若者たちに知らしめ、先住民たちの苦悩を彼らにできうる限り「軽減する」(iv) という義務を教え諭すことこそが、チャイルドの本作品執筆の主たる動機であることは明らかである。

ピークオッド族、ナラガンセット族、ポカノケット族とのニューイングランド植民地の衝突の歴史を扱ったこの作品の中で、当然のことながらチャイルドはこれら二つの目的を補完するニューイングランド史への反証とキリスト教の在り方を交互に交えて話を展開させる。母親が二人の娘イライザとキャロラインに語る白人植民者とアメリカ先住民の衝突の歴史は、白人植民者側の視点から語られた歴史的陳述に疑義を唱え、その非を論じ攻撃することを目的とし、これが娘二人の歴史の潮流に内在する因果関係への洞察と、植民者の側の暴力とその源への疑問を誘発し、そしてこの洞察と疑問がキリスト教の本来の在り方を若者に問い直させるという形を取る。このようにしてチャイルドは当時進行中であった先住民強制移住問題に関する米国政府の政策を批判し、その政治の実態に若者の目を向けさせる。

白人植民者とその末裔の書いた歴史に対する疑義、その主義と主張にみられる「知性を惑わす暗い迷信」、「理性と啓示」が一緒になってこそ生まれる「愛情の籠った慈善」(58) の欠如、そしてこれと並行して先住民の

優しさ、その習俗への理解の必要性が、「同情と若者の代表」(44)としての二人の娘に語られる。先住民の見せる「原始的美徳」は「慈悲深い自然の創造主が吹き込まれた崇高な資質」(82)であり、先住民の「寛容さ(liberality)と精神の真の偉大さ」(62)はその「物惜しみしない施し(munificence)、親切心、自制心」(64)に集約される。そして、「植民地と友好的関係を維持しようとした」(88)「平和的性格」(89)の先住民を情け容赦なく殺害し排除した英国植民地の行動は、すべて歪曲化されたキリスト教、すなわちイスラエル民族の選民思想とそれを受け継いだピューリタニズムに起因するとして、チャイルドの批判の矛先はカルヴィニズムに向けられる。

英国における迫害から逃れてきたピューリタンたちは、「自らの良心の命ずるがままに神を崇拝する特権を得ようとして見知らぬ土地に保護を求めながら」(90-91)、新しい土地で生活し始めると、自らの苦悩で知りえたはずの知恵と節度を忘れ、「彼らとほとんど異なることのない人々」(91)を迫害し、彼らの教義への厳守を強要した。しかし、「不正と復讐と残忍さをよしとする神は我々の神ではない」(95)とするチャイルドは、キリストは「人類全体に平和と善意を示すためにこの世に送られた」のであり、「慈悲」と「理性的な礼拝」(96)こそが神が命じているものだと娘たちを諭す。

チャイルドの語りの焦点は自ずとカルヴィニズムが受け継いだイスラエル民族の選民思想に移る。カナーン人の悪徳とイスラエル人の神聖さと善という捉え方は、すべての国家に共通している「自己愛」の誇張にすぎず(96-97)、神が最も親しい形でイスラエル人との交感を行ったのであれば、神の声を聴いたカナーン人にもその特権は認められたはずであり(97)、アブラハムが逗留した地域の人々も同様である(98)。サラとエジプト王、アブラハムとフィリスティン王の関係を綴った聖書の陳述からも、この異

教徒に「正義と慈恵の強い意識」(98)があったことは明らかであり、サラの死後マクペラの土地を購入しようとしたアブラハムへのエフロンの答えほど「気高く寛大な」(98)はなかったとチャイルドは言う。

メシアの約束した恩寵はイスラエル民族の専有物ではなく、相争う国家の中に秩序と調和をもたらし真実の道に導くべきメシアの到来は皆が期待していたものであり、この出来事はイザヤ書だけでなく古代ローマのシビラの書にもあった(99-100)。それどころか、シケム人の背反的殺人やヤコブの子孫による略奪、弟ヨゼフを奴隷として売り払うといったおぞましい行為、その子孫たちの犯した残虐な行為には「神の道德属性」(99)は全く窺われず、「横柄で反抗的で闘争的民」であり「絶えず国内、国外の戦争に従事していた」(102-3)イスラエル人には「幸福な、もしくは繁栄した時期」(102)は与えられることはなく、彼らは神の恩恵を失い、国は破壊され捕囚の身となったとチャイルドは続ける。

「ユダヤ教信仰の不純な影響」(108)からキリスト教を浄化することが求められているとするチャイルドは、カルヴィニズムの柱石であるユダヤ教徒の選民思想の排除を唱え、予定説がいかにも人々の独善を招いているかを娘二人に説明するため、独立心を失った女性、聖書は不可解とする女性、この世の罪が来世で善となると豪語する女性の話を語って聞かせる。ピューリタンの「正義と善行という生得の信念」こそが迫害と悪事を助長したのであり(115)、理性にも聖書にも基づかないこの信念と説教者の謬見に多くの者が気付かなかったことが迫害と悪事を生んだ(118-19)ことをチャイルドは強調する。

チャイルドが語るフィリップ王戦争は、カルヴィニズムの選民思想における正義と善行と理性の欠如が引き起こした白人側の一方的な戦いとして提示される。自らの利害に執着しマサソイトへの疑いを促したスクワントを除けば先住民は友好的であり(123-6)、メタコムの兄アレグザンダー

の陰謀説は白人の側の虚偽であり、不当な条項に署名させられたメタコムは「良心の咎めも正義を重んずる心もない」(136)者たちの犠牲者、「世俗的な偏見のないハッチンソン(Thomas Hutchinson)」の言によれば「高貴な精神の持ち主」(139)であった。売国奴ソーサマンの処刑はメタコムの当然の権限の行使(142-3)であって、また、英国人との平和協定を唱えた者を彼が処刑したことも「彼の国の法に照らして正当と認められるべきもの」(166)なのであり、彼の行為は「私[母]の理解では許されるべきもの」(166)である。多くの長が奴隷の状態に追いやられ、また不名誉な死を遂げたことを目の当たりにし、狡猾な友人や部下の裏切りが部族の悲劇を引き起こしたことも知っていたメタコムが、敵との講和を主張する人物の忠義を疑ったのも当然のことであり、相手の陰謀を食い止めるには相手を殺すしかなかったとチャイルドは語る(167)。

「この勇敢な人物が自らの独立を維持し、国の権利を不法に占有しようとした外国勢力から母国を守ろうという不撓不屈の決意を見せた、血なまぐさい戦い」(157)について語り終えたチャイルドは、ニューイングランドにおける先住民の起こした戦闘について次のように語る。

We must keep in remembrance, that the combat was maintained by the Indians to preserve themselves and their country from subjugation to usurpers, whose ingratitude and perfidy they held in abhorrence, and that, although they in some instances manifested a cruel and vindictive spirit in subjecting their prisoners to torture; yet as I find but one or two instances specified, I conclude that few suffered this ordeal, though it was made a pretext by the English to inflict the worst of evils on those unhappy natives who fell into their hands. (161-2)

母親の語る先住民の惨禍の歴史を聞いた娘二人は、先住民が植民者に与えた暴力と被害はあくまでも限定的で数少ないものであり、先住民は完全に白人の欲望と征服の犠牲者であること、白人こそ「救世主キリストの教えの敵」(169)であることを確信する。

フィリップの最期の描写で *The First Settlers of New-England* の主要部分は終わり、その補遺として西インド諸島の植民の歴史(コロンブスと西インド諸島のスペイン人への批判とイザベラ女王への賛美、177-219)、そして最後に“*Illustrations, Anecdotes, &c.*”として十八世紀、十九世紀における先住民に対する米国政府の政策への批判(219-92)が付け加えられている。「モーゼと他のユダヤの指導者を模範とした」(179)コロンブスの「迷信と貪欲」(187)、「富と権力への欲望」に誘惑されたスペイン人の「狂信的行動と頑迷」(213)、それらと真っ向から対立する「より理知的で、思いやりがあり、寛大な精神をもった」(207)先住民の性格が前者で語られ、後者では人間の「生まれながらの墮落」(240)を想起させる白人の側の「非人間的な冒険的行為」(239)と先住民の側の「英雄的な愛国主義」(237)が対比的に提示される。

The more we reflect, the more firmly are we impressed with the conviction of the wisdom and goodness of the Almighty, who requires of us nothing but what is calculated to promote our happiness and best good, both in this life and that which is to come. Hence in the character and principles of Jesus, we recognize him as a teacher inspired by God to illustrate and confirm those divine impressions, which He hath graciously written on the heart. In the minds of our Aborigines this law hath not been darkened or corrupted by superstition, and they

are guided by the pure lustre of that light, which is from above, when not contaminated by our vices. We must be convinced, therefore, that the primitive virtues, which elevate these children of nature in the scale of being, are congenial to the mind, and, if properly cultivated, will subdue the wayward and sordid passions which are nourished in civilized society. (253-4)

上記の引用においてチャイルドは先住民の持つ性質とイエス・キリストの愛は同じであるとしているが、その直後に先住民の「原始人の美德」は「適切に陶冶される」必要があり、それによって文明社会が生じせしめる「頑迷で卑しむべき欲望」を抑えることができるとしている。ここには合衆国の植民の歴史における弱者としての先住民の姿があり、「原始人の美德」は文明社会ではその本質を維持しえず、「現世と来世の両者において幸福と最高善を増進させる」ことはできないというチャイルドの思いがある。

チャイルドのこの一節は人種的優劣は存在しないとしたチャイルドの見解とは齟齬をきたす。ニューイングランド植民地が先住民に加えた暴力と狂信的行動に関して微細にわたって説明描写する前に、チャイルドは米国における先住民排除の歴史は異人種混交に対する誤った考えが白人の側にあったからだと指摘している。ギリシア人は天文学分野においてヒンドゥー人に劣っていたこと、彼らがエジプト人から多くを学び、また知を求めてアジアに進出した (67) ことを例示しつつ、異人種混交によって白人種は失うものより得ることが多かったはずだとチャイルドは述べる。

... I am free to confess that in my opinion we should have gained more than would have been lost. The primitive simplicity, hospitality, and generosity of the Indians would gradually have

improved and softened the stern and morose feelings resulting from the false views of religion, and the superstitious reverence in which the settlers viewed the characters of the Israelites, whose example they believed themselves authorised to follow. Our arts and sciences would have imparted to the Indians new light and vigour. The pure religion of Jesus would have strengthened and confirmed their innate convictions of the character and attributes of the Almighty, and the example of our divine master and instructor would have taught them to subdue their wayward passions, and evil propensities. We should thus have been saved from the hordes of vagrants, who have been allured to our shores, like vultures by the scent of prey, that they might seize on the spoils of the natives whom we have destroyed; and though we might not be able to boast, 'the glorious result of ten millions of white inhabitants,' the red men who would have formed a part of our population, would have been to us a wall of defence; neither would the innocent blood we have so profusely shed, which cries aloud for vengeance, subject us to the fearful retribution which has fallen on the guilty nations who have established themselves on the ruins of their fellow men. (65-66)

上記引用の「数千万人の白人住民という輝かしい成果」という言葉は 1823 年 *North American Review* に発表された Edward Everett による Jedidiah Morse, *A Report to the Secretary of War of the U.S. on Indian Affairs* 書評からの引用 (“On the state of the Indians” 37) だが、ナラガンセット族などニューイングランド先住民の消滅への悲嘆よりも「知とキ

リスト教と幸福の進展」(“On the state of the Indians” 37) こそが尊重されるべきとするエヴェレットが、*A Report* の中でニューイングランドの政策を批判したモースに異論を唱える(“On the state of the Indians” 38) 際に使った表現である。その意味でチャイルドが米国には「先住民住民か白人住民かという二者択一の選択肢しかありえない」(“On the state of the Indians” 38) とするエヴェレットに反駁していることは明らかだが、しかし、ここには白人住民に代わるものとしてのアメリカ先住民の文化の存在を積極的に認める彼女の姿勢は見られない。そして「我々の学問」が先住民に「新しい光と活力」を与え、先住民の「神の性格と特質に対する生得的確信」をキリストの教えが「強靱なものにし確証してくれる」とするチャイルドの言葉は、あくまでもあるべき姿としてのキリスト教の枠組みの中で犠牲者・弱者としての先住民の文化を解釈していることを示している。

キリスト教文明の優越性とその発展に対するチャイルドの姿勢を暗示する例を更に二つ挙げよう。ひとつはチャイルドがアーヴィングのフィリップ論から引用する際に彼の文章を意図的に編集しつつ繋ぎ合わせていることである。彼女は「自然状態」を先住民に見たアーヴィングの表現、先住民こそ「人間性により近い状態」(170) を引用しつつも、文明社会は「この生得の特性の独特で際立った特徴」を「育ちのよさと名付けられたものの水平化する力によって除去」し、「柔弱化」し、その結果「取るに足らぬ偽り」を生じさせるとした (Irving 1013) アーヴィングのフィリップ論の一節は割愛し、キリスト教文明の進展が暴力に彩られたことを明確にするアーヴィングの次の一節を続けて引用している。

These reflections arose on casually looking through a volume of early provincial history, wherein are recorded, with great

bitterness, the outrages of the Indians, and their wars with the settlers of New-England. It is painful to perceive, even from those partial narratives, how the footsteps of civilization in this country may be traced in the blood of the original inhabitants; how easily the colonists were moved to hostility by the lust of conquest; how merciless and exterminating was their warfare. The imagination shrinks at the idea, how many intellectual beings were hunted from the earth; how many brave and noble hearts, of nature's sterling coinage, were broken down and trampled in the dust. (170-71)

ここには「征服の欲望」に駆られた白人の犠牲者となった先住民の姿が強調され、アーヴィングが見た先住民の知性と彼らの勇敢さ、高貴な精神との強い関連は曖昧な位置づけを与えられている。そしてアーヴィングのフィリップ論の解釈としてチャイルドは彼の先住民文化への共感をジョージ・ワシントンが彼らに抱いた「尊敬と父親的気遣い」と重ね合わせている。

... his sentiments toward our Indians, bear a close affinity with the respect and paternal solicitude, which ever actuated our Washington. The writings of Irving, all bear the stamp of benevolence, and a lofty integrity, uninfluenced by those miserable and sordid calculations which sanction the sacrifice of the life and comfort of fellow-beings to ambition or gain. (176-77)

もうひとつの例はイザベラ女王への過剰とも言えるチャイルドの賛美

である。興味深いことに、チャイルドは先住民の生活と荒野をロマン主義的に解釈したアーヴィングの “Traits of Indian Character” (1819-1820) ではなく、1829年出版の彼の *A Chronicle of the Conquest of Granada* からの引用をフィリップ論の後に続ける。この西インド諸島の先住民の歴史の描写の中で、チャイルドはイザベラ女王に対するアーヴィングの賛辞をコロンブスの誤った宗教的見解と対比させるために詳細に引用している。「人間性を犠牲にして宗教を助長するよう意図されたあらゆる方策」(181) に反対したイザベラ女王について、チャイルドは次のようにアーヴィングから引用する。

In the intervals of state business, she assembled round her the ablest men in literature and science, and directed herself by their councils in promoting letters and arts. Through her patronage, Salamanca rose to that height which it assumed among the learned institutions of the age. She promoted the distribution of honours and rewards for the promulgation of knowledge; she fostered the art of printing (recently invented;) and encouraged the establishment of presses in every part of her kingdom; books were admitted free of all duty, and more, we are told, were printed in Spain, at that early period of the art, than in the present literary age. It is wonderful how much the destinies of countries depend at times upon the virtues of individuals, and how it is given to great spirits, by combining, exciting, and directing the latent powers of a nation, to stamp it as it were with their own greatness. Such beings realize the idea of guardian angels, appointed by heaven to watch over the

destinies of empires. (182)

チャイルドが批判するコロンブスの非キリスト教的姿勢・欲望と対比的に描写されるイザベラ女王への賛美の数々は、キリスト教文明の新大陸支配に暗黙の了解を与えている証左でもある。

チャイルドのキリスト教文明に関する見解がはっきり窺えるのは 1843 年の *Letters from New York* と 1868 年の “An Appeal for the Indians” である。*Letters from New York* においてバーナム・アメリカ博物館を訪れたチャイルドが、西部の森からやってきたばかりのソーク族、フォックス族、アイオワ族 15 名の先住民を目にしたときの感想を記し、現実の先住民の姿に恐怖を覚えたことを正直に告白し、このような思いを抱いたことに罪の意識を覚えたチャイルドは、先住民が「同じホームを求める、同じ神の子供」(*Hobomok and Other Writings* 189) であることを自分自身に改めて確認しようとする。そして彼女はキリストの愛の名において行われる奇跡はユダヤ・キリスト教文明によってすべての人間の種族を高めることであると述べている。また、先住民のインディアンテリトリーへの強制移住、白人による先住民支配に反対する “An Appeal for the Indians” において、先住民の子供の教育に関してチャイルドは初めは部族の歴史や習慣は尊重すべきであるとし、英語教育においても、部族の言語を主として行うべきで、次第に英語を通して先住民を優しくキリスト教文明に近づけるべきだとする。先住民は同じ人間であり、かつ白人が教育すべき子供と見るべきだと主張するチャイルドは、先住民は白人と違って条約を破ることはないこと (*Hobomok and Other Writings* 227-28)、いかに復讐心に燃えても女性の捕虜の貞操を汚すことはなく、子供の教育において暴力を使うこともないこと、黒人と違い先住民は隷属することを嫌うこと (*Hobomok and Other Writings* 229) 等を挙げつつ、先住民は知的にも

道徳的にも優れている存在であること (*Hobomok and Other Writings* 230) を強調し、先住民を子供として捉え、キリストの愛をもって教育すれば文明化は十分に可能であるとしている。

Hobomok において Mary Conant はカルヴィン主義とは真っ向から対立する恋人 Charles Brown にアメリカに欠如している信教の自由や美や青春を求め、そしてチャールズを失った後に先住民の Hobomok と結婚するが、物語の結末ではチャールズが帰還し、カルヴィニズムの象徴である父 Roger Conant と和解する。ニューイングランド社会の発展がホボモックの自己犠牲 (「*Yamoyden* から *Hobomok* へ」 50) のもとに成立していることもチャイルドは認めている。カルヴィニズム糾弾に終始する *The First Settlers of New-England* はその意味で *Hobomok* と比べれば過激な史観を擁している作品であり、また、*Letters from New York* と “An Appeal for the Indians” におけるチャイルドの先住民に対する姿勢とは明らかに異なるものがあることも否定できない。恐らく犠牲者・弱者としての先住民への庇護と慈悲の心の啓発を若者に提示するという文学形式が可能にした過激な歴史論であり、その意味では十九世紀初頭の保守的歴史修正論に異議を唱える新しいニューイングランド史観であったと言えるだろう。

注

- 1 ポールフレイの *Yamoyden* 書評と *Hobomok* の関係については中村、「*Yamoyden* から *Hobomok* へ」、27-32 を、また、*Hobomok* における英国植民地の歴史の擁護については中村、「*Yamoyden* から *Metamora* へ」、27-29 を参照

- 2 Jedidiah Morse と Elijah Parish の *A Compendious History of New England* については Cheryl, 168-69 を、Abiel Holmes の *American Annals* については『ヤモイデン』, 296-97 を参照。1820年代、30年代のボストンにおけるピューリタニズムに関する政治演説と歴史書については Konkle, 131-44 を、またピルグリム・ファーザーズとアメリカ民主主義の萌芽期との関係の考察については Conforti, 171-96 を参照。

Works Cited

- Child, Lydia Maria. *The First Settlers of New-England; or, Conquest of the Pequods, Narragansets and Pokanokets. As Related by a Mother to her Children.* Boston: Munroe and Francis, 1829.
- . *Hobomok and Other Writings on Indians.* Ed. Carolyn L. Karcher. New Brunswick: Rutgers UP, 1992.
- Conforti, Joseph A. *Imagining New England: Explorations of Regional Identity from the Pilgrims to the Mid-Twentieth Century.* Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001.
- Irving, Washington. *Washington Irving: History, Tales and Sketches.* New York: The Library of America, 1983.
- Konkle, Maureen. *Writing Indian Nations: Native Intellectuals and the Politics of Historiography, 1827-1863.* Chapel Hill: U of North Carolina P, 2004.
- “On the state of the Indians: *A Report to the Secretary of War of the U.S. on Indian Affairs, comprising a narrative of a Tour performed, in the summer of 1820, under a Commission from the President of the U.S., for*

the purpose of ascertaining, for the use of the government, the actual State of the Indian tribes, in our Country: By Rev. Jedidiah Morse, D.D. New-haven, 1822, 8vo.” *North American Review*, New series, 7 (1823): 30-45.

Walker, Cheryl. *Indian Nation: Native American Literature and Nineteenth-Century Nationalisms*. Durham, NC: Duke UP, 1997.

中村正廣「*Yamoyden* から *Hobomok* へ—Palfrey の書評と「アメリカ的変容」の関係」『外国語研究』（愛知教育大学英語研究室）、第 42 号(2009): 27-57.

中村正廣「*Yamoyden* から *Metamora* へ—1820 年代の先住民物語」『外国語研究』（愛知教育大学英語研究室）、第 43 号 (2010): 17-42.

J.W. イーストバーン／R.C. サンズ、『ヤモイデン—もうひとつのフィリッポ王戦争』（中村正廣 訳） 中部日本教育文化会、2010.